

再生と覚悟

秋田県横手市立増田中学校

三年 大石 結子

中学三年生になり、約五カ月が過ぎた。日に日に卒業、そして受験も近づいている。残り少ない中学校生活を楽しみながら、私は時々、過去を振り返る。そんな時、明確に思い出すのは、いつもあの頃のことだった。

中学二年生の夏。私が所属していたバレーボール部は、三年生が引退し新体制となった。私は副キャプテンに任命され、キャプテンを支えよう、そして自分も成長しよう、と意気込んでいた。

ところが、いざ主力となってみれば、もともとの臆病な性格が原因で、周りのみんなのようにプレーできていないことに気がついた。レシーブも、スパイクも、何もかも下手。練習試合や公式戦も、失敗ばかりだった。毎日、練習が終わると逃げるように体育館から去っていた。成長したい、という気持ちはあるのに。自分の思いに正直にプレーできない自分の弱さに嫌気が差していた。誰かに相談してみよう、と思ったことがないわけではなかったが、自分の問題だから他の人に迷惑はかけられないと思い、誰にも打ち明けなかった。

みじめな毎日を過ごすだけなら、いつそ部活動をやめてしまおうか。あの頃はそんな思いだけが頭を

駆け巡っていた。

しかしその後、私は引退までバレーボールを続けることになる。あれだけ部活動を嫌がっていた私になぜ再生できたのか。それはやはり、あの本が「ちから」をくれたからだろう。

あの本とは、加藤シゲアキ氏の『閃光スクランブル』のことだ。読書好きの私は、つらい部活動の反動からか、無性に本が読みたかった。そんな時、近くの書店で手に取ったのが『閃光スクランブル』だった。なぜ手に取ったかという点、タイトルに光という字が入っているのでは、きつとこの本が私を救う光になってくれるのではないかと、かすかに期待したから。そうやって物にすぎるほど、当時の私は追いつめられていた。

『閃光スクランブル』を買って帰り、その日から毎日読み続けた。心に深い傷を負ったゴシップカメラマン・巧と、世代交代により自分の居場所を失ったアイドル・亜希子が出逢い、思いがけない逃避行の中で本当の自分を見つけていく愛と再生の物語だった。タイトルの鮮烈さだけでなく、二人の主人公は偶然にも、心が孤独である、という共通した部分があり驚いた。特に亜希子とは境遇が似ており、亜希子の葛藤に共感できた。そして、巧が亜希子に、亜希子が巧に救われたように、私も『閃光スクランブル』により、確実に心の傷が癒えていった。この後部活動で何があっても、私には『閃光スクランブル』がある。感情のはけ口にしていただけかもしれないが、それだけでとても安心できた。作中の巧と亜希子の言葉、それぞれの道を歩み直していく再生の姿は、私に生きる「ちから」をくれた。『閃光スクランブル』が、私の光となったのだ。

作中で、巧はこう言っている。「世界の中心は自分じゃない。自分なんかなくなると

て世界は平気な顔して回り続ける。だったら置いてかれてもいい。俺はそう思う」

置いていかれても大丈夫。そんなことを言う人に私は出会ったことがなかった。それゆえに新鮮であり、ほっとした。巧に、「つらいことに立ち向かうのもいいけれど、時間に身を任せて、楽に過ごしてもいいんだぞ」と教えてもらった気がした。傷は時間が解決してくれる。今も、傷ついたときはあまり頑張るすぎないようにしている。

この頃にはもう退部の意思はなく、心の状態もだいぶ回復していた。しかし、依然として周りより劣っているのは事実。何か武器を見つけなければ、と少々焦っていた。そんなとき、亜希子の言葉に出会い目が覚めた。

「私の魅力は、覚悟よ」

これ以上ないようなつらい経験をしたからこそ、この先何があっても大丈夫。自分を信じて生き続ける。生き抜く。それが「覚悟」の意味するものだと思う。そして気がついた。プレーの種類ではないが、「覚悟」は武器になる。亜希子と同じく深い傷を負った経験が私にもある。だから私にもきつとできる。私の武器は、この世界を生き抜く覚悟。それを武器にして、続けてみせる。傷も完全に癒え、臆病な自分が強い自分に変われた瞬間だった。

こうして私は部活動を続け、最後の公式戦を迎えた。勝つことはできなかったものの、覚悟を武器に強い心で戦うことができ、自信と達成感が得られた。続けてきて良かった。

『閃光スクランブル』に出会って、私は救われた。どんな傷も時間が治す。今までの自分を信じ、覚悟を持って生きる。『閃光スクランブル』との出会いがくれた生きる「ちから」が、今も私の支えになっている。